第 12 回神戸市政調査会議事要旨

日時：2026 年 10 月 13 日（火曜） 13 時から 15 時

場所：市役所 1 号館 14 階大会議室

委員出席者（あいうえお順）

織田澤 利守　神戸大学大学院工学研究科教授
佐合 純　iC 株式会社代表取締役
品田 裕　神戸大学大学院法学研究科教授
谷口 真澄　神戸市行財政局公文書アドバイザー
早川 有紀　関西学院大学法学部教授

神戸市出席者

久元 喜造　神戸市長
西尾 秀樹　企画調整局長
服部 星次　企画調整局副局長
吉田 高志　企画調整局部長（大学連携推進担当）

■全体要約

本会議では、デジタル化や価値観の多様化が進む社会構造の変化を前提とし、「地域社会の復権」をどう捉えるかについて議論が行われた。委員からは、アドラー心理学に基づく共同体感覚の再構築や、時間軸・空間軸の捉え直し、ワクワクする未来像の共有、日常の隙間時間を活用した緩やかな関わりの重要性が示された。さらに、情報過多やタイムパフォーマンス偏重がもたらす影響、断片化された社会における新しい形の「身体共同行為」の意義、そして行政が地域に議論の余白を生むための伴走型支援の必要性について意見が交わされた。次回に向け、マクロなメッセージ発信とミクロな実践の両面から議論を深める方針が確認された。

■議題

地域社会の復権という言葉をどのように捉えるか、社会の変化と今後の地域社会のあり方について

■会議冒頭における座長の発言の概要

〇品田座長

前回の調査会ではデジタルを利便性向上にとどまらず、人とのつながりや社会参加を支える手段として捉える方向性が共有された。本日は、久元市長より示された「デジタルを活用

しながらも、その先にある人と人とのつながりやリアルな地域社会の復権につながる方策を議論してほしい」という方向性を踏まえ、「地域社会の復権という言葉をどのように捉えますか」という事務局が事前に設定した問いに対する各委員の回答をもとに議論を進めていきたい。

■各トピックにおける主な意見及び論点

トピック１：「地域社会の復権」の捉え方

【論点】

「地域社会の復権という言葉をどのように捉えますか」という難解なテーマに対し、目指すべき地域社会の理想像や、現代における住民の関わり方について各委員の多様な視点からアプローチが共有された。

【主な意見】

〇委員発言：

住民が対話と協働で共通善を追求し、共同体感覚を育んで地域社会を再構築する状態が理想である。心理学における共同体感覚（所属感、信頼感、貢献感）を地域社会に置き換えると、居心地の良い場所が存在し、信頼関係が築かれ、直接的な見返りを求めない間接的互恵性が成立している状態となる。熟議民主主義を理想としつつも、まずは会話を通じて目先の「我々」という感覚を拡張していく日常の関係性が重要である。

〇委員発言：

地域社会の復権とは、人と人とのつながりや共助、共鳴であり、自分が社会に対して何ができるかを考えることである。人はワクワクすることに関わりたいと思う性質があるため、常識の枠を外して未来像を語る夢想家が、集う人々と地域を動かす力を取り戻すことが必要である。自社の利益だけでなく、何に共鳴するかを真摯に考える人々が増えている感覚がある。

〇委員発言：

急激な社会の変化によりかつての地域社会の再生は困難であるが、時間軸と空間軸を取り入れることで復権の可能性が見えてくる。時間軸においては平時と有事をセットで考えることで地域社会における自身の立ち位置を意識しやすくなり、空間軸においては居住地だけでなく職場やサードプレイスも地域社会として位置づけられる。単身世帯が約半数に達する中、有事の備えなどを契機として個人と地域社会の接点を持つことが喫緊の課題である。

〇委員発言：

生き方が多様化し時間の使い方が変化する中、かつてと全く同じ地域社会を形成することは難しく、日常の隙間時間で緩やかに継続して関わっていける場が求められている。また、現在の自治会は世帯主である男性が中心となり多様性が反映されにくい側面があるため、多様な価値観を持つ住民が継続的に関われる様々な場が存在することが望ましい。

トピック 2：社会の変化とデジタルの影響

【論点】

地域社会を考える前提として、激しい社会変化の実相をどう捉えるかという課題が提起された。ゲマインシャフト等の伝統的枠組みに代わる視点や、断片化された時間と空間の中に生きる我々のつながりのあり方について議論が交わされた。これに関連し、定年退職者等への配慮として市役所のアンケート等における職業欄を廃止した取り組みが紹介されるとともに、デジタル技術の普及やタイムパフォーマンス（タイパ）偏重の傾向がもたらす光と影について意見が交わされた。さらに、デジタルとリアルの世界を相互に行き来する中で、現実の地域社会においていかに人々の承認や自己実現、社会への貢献意識を満たしていくかについても問題提起がなされた。

【主な意見】

〇委員発言：

DX やデジタル化によって、これまで確固たる地域のリーダーを中心に成り立っていた自治的な基盤が一気に変化した。誰もが情報にアクセスし地域の問題に関わることができるようになり、幅広く多様な方々が関われるようになった局面の変化は非常に大きい。

〇委員発言：

昔は固定的な所属が関係性の軸であったが、現在は大量の情報により、自身の興味や関心の重なり具合を重視する流動的なつながりへと変化している。一方で、退職により所属を失い、関心の近い他者にアプローチするツールを持たない高齢者が、現代の社会の狭間に落ちてしまっている実態がある。高齢者と学生のワークショップにおいて、町での役割や好きなことを記した名刺を作成するというアイデアが出たが、これまでの所属がなくても自分を表現するツールが交流のきっかけとして非常に有効である。

〇委員発言：

現在起きている変化の根幹は、何事も効率性という一元的な基準で測ろうとする想像力の欠如である。価値観が多様化する一方で、ショート動画のように文脈を経ずに情報を受け取ることで、他者の物語を想像し共感するプロセスが抜け落ちている。当面の自分が損をする物事を即座に拒絶する傾向が若者を中心に強まっている。

〇委員発言：
デジタルの力で情報が容易に得られる反面、時間に対してどれだけのリターンを得られるかというタイムパフォーマンスが強く意識されるようになった。効率的に時間を消費する一方で、推し活のように価値を感じるものには没入するという、リアルな体験への集中とデジタル空間への逃避の二極化が進んでいる。

〇委員発言：
電車内でスマートフォンをぼーっと眺める姿からは、課題に直面して考えるという行為から距離を置き、自分だけのデジタルの世界に逃避している側面が窺える。

〇委員発言：
効率性が最優先されることで、興味がないものには全く触れず、そこで何が起きているかを知る機会も持たないという状況が起きている。

〇委員発言：
SNS 等で自分の好む情報ばかりを受け取ることで、異なる他者に対する想像力が著しく欠如し、考えようともしなくなる状況は、地域社会にとって大きなマイナスである。

〇委員発言：
過去に比べて圧倒的に情報量が増加したからこそ、現在は好き嫌いを選択できるようになったというデジタルの恩恵の側面もある。過去は情報量が少なすぎて選択すらできなかっただけである。

〇委員発言：
他者から認められるという行為が、リアルの場からデジタルの世界における「いいね」という分かりやすい評価へ移行しやすくなっている。「緑縁衆」のように、ついでに行う活動でありながら感謝もされる仕組みは、リアルな場とデジタルの間を行き来しつつ、現実社会において自身の存在意義や貢献実感を得られる設計として優れている。

〇委員発言：
「緑縁衆」の取り組みは、日常の隙間時間に行うことができ、継続的に関われるという点が非常に魅力的である。

〇委員発言：

地域貢献においては、受動的ではなく自ら動く姿勢が鍵となる。情報過多で受け身の姿勢が強くなると、活動の価値が数値的な評価に置き換わりやすいが、自ら行動して一人からでも感謝や共感を得ることで強い実感が得られる。

トピック 3：共同体感覚と身体共同行為

【論点】

現代においても共同体感覚は存在し得るのか、それは相互承認によって成り立つのかという理論的背景について課題が提起された。また、相互承認が成立しにくい単身世帯等において、バーチャルなつながりを現実空間のアクションに結びつけるアイデアが求められた。さらに、お祭りのような非日常の「ハレ」の世界での身体共同行為を、隙間時間を活用しつつ「ケ」の日常世界でいかに成立させ、新しい形の緩やかな共同体を生み出せるかについて意見が交わされた。

【主な意見】

〇委員発言：

人間は一人で生きられるほど強くないため、究極的な理想として共同体感覚はあるべきである。血縁とは異なる形であっても、その街が好きだという感覚で居住地を選び愛着を持つことが地域の縁の基盤となり得る。直接的な見返りを求めずとも互いに貢献する意志を持ち合うことで、相互承認は成立する。

〇委員発言：

ネット社会で出会った人々とフィジカルな場で会うような関係性において、強い動機さえあれば人は時間を作るものである。熱量を持てる対象に出会えていないから「忙しい」という言葉で片付けており、アクションを起こすための強い動機が求められている。行政のように直接的な責任を負う立場にないからこそ、無責任に夢を語ることができる。例えば、私は、ポートアイランドでの農業をしたいと話したことがある。すると様々な人がリアクションをくれた。人は何かしらの想いを持っているのだと感じた。土や土地が農業をやるうえでのネックだといわれているが、それは皆が勝手に作り出している妄想のネックではないだろうか。夢想家として諦めずに走り回る存在が必要である。

〇委員発言：

居住地という第一の地域社会においては、好んで移住してきた方々に対しても地域の歴史や文化資源の素晴らしさを訴えかけ、共通の認識を持ってもらう平時の活動が重要であり、そこに愛着を持てるかが共同体形成の鍵となる。

〇委員発言：

個人の興味や関心を起点としながらも、共通の体験を通じて「私たち」という感覚が生まれることが重要である。お祭りのような身体共同行為は、同じ場所で一緒に楽しみ、思い出を共有することで、人々の共鳴やつながりを生み出すきっかけとなる。

〇委員発言：
日常のケの世界では各自が自由に過ごし、ハレのイベントの際に皆で一緒に活動することで、一気に共同体的な感覚が形成される。例えば、共通の体操のような独自の取り組みを普段は各自で行い、イベント時に皆で共有するといった形が考えられる。

〇委員発言：
回覧板が廃止されたことで、確実な情報の伝達手段だけでなく隣人との会話のきっかけも失われており、SNS の発信だけでは補えない大きな変化が生じている。

〇委員発言：
情報過多の現在において、昔の市民時報のような限られた紙面に情報を凝縮し直截に伝える工夫は強い印象を与える。また、図書館やカフェなどの第三の居場所において、直接会話をしなくとも緩やかな雰囲気の中で同じ時間を過ごすことも、広い意味での身体共同行為と捉えられる。

〇委員発言：
空間的には同じ場所で活動しつつ時間は全く異なる世代間であっても、同じような経験をしたという一点を共有するだけで心のつながりが生まれる。個別の活動の上位（メタレベル）において経験を共有できる仕組みがあればよい。

〇委員発言：
イギリスのパブで一緒にスポーツを観戦し盛り上がるような、日常の隙間時間での緩やかな一体感が愛着につながる。神戸には多くのスポーツチームがあり、そうしたきっかけを作りやすい環境にある。

トピック 4：自治体の役割と今後の地域活動のあり方
【論点】
行政は法定の行政サービスを並列的に供給するだけの主体でよいのかという、自治体本来の役割について課題が提起された。また、お祭りなどの地域活動において行政が介入することの弊害や、キーパーソンが現れない大半の地域に対して行政がどうアプローチすべきかという問題意識が示された。これに対し、隙間時間を活かした持続可能な地域活動のあり方や、地域に議論の余白を生むための伴走型支援の必要性が提示された。

【主な意見】
〇企画調整局：
隙間時間だけで既存の地域団体のフルスペックの活動を維持することは不可能であり、どこを諦めどこを守るかの取捨選択が必要である。その中で声を上げられない方々の声を拾い上げることが行政の役割である。空いた隙間時間を利用し、得意分野だけをパートタイムで協力する応援団を増やしていくことで地域のあり方を変えていく必要がある。

〇委員発言：
合意形成の大上段に構える前の段階として、日常的に愛着を育み、顔の見える関係を構築して誰かと誰かをつなぐ地道な活動が行政には求められる。そうした下地の構築に知恵を絞ることにこそ職員のやりがいがある。

〇委員発言：
地域のソーシャル・キャピタルが高ければ行政サービスの効果も高まる。単なるサービス提供にとどまらず、住民同士が自発的につながるための組織化を伴走してサポートする役割が行政には必要である。

〇委員発言：
行政の福祉国家化により、地域の自治の領域が既存メニューを消化するだけの行政サービス代行化へと縮小している。現在の地域活動には本質的な議論をする隙間や余白がないため、行政のサポートによって既存業務をスリム化し、地域に必要なものを議論するための余白を創出することが求められる。

〇委員発言：
長田や水道筋のように、一人熱狂的な人物が動き出すことで街の空気が変わり、次の世代の行動を促すムーブメントが起きている。既存の団体が役割を担うことで周囲が自由に活動できる側面もある。活動の広がりには行政の KPI で測れない、ある種の自由な余白が必要であり、長い時間軸での評価が求められる。キーパーソンがいない地域への次の一手として、緑縁衆のように最初の一歩が踏み出しやすいパッケージを活用し、他人のアイデアに乗っかって面白がる経験を通じて次なる人材が育っていくことが期待できる。また、現状に満足している地域よりも、人口減少などの危機感や不満を抱えている地域の方が新しい動きを生み出す原動力が働きやすい。外部人材やスタートアップ連携など、異質なものを掛け合わせる取り組みもイノベーションには有効である。

〇委員発言：

誰もが最初から先頭に立つ必要はない。最初の一歩が踏み出しやすい仕組みを通じて継続的なつながりが生まれれば、あともう一歩を踏み出してみようという意欲の醸成につながる。

■会議終盤における市長及び座長の発言の概要

〇久元神戸市長：

今後の大きなテーマとして、第一に、誰もがスマートフォンを見ている現状において「リアルな世界の復権」に向けて市民にどのようなメッセージを発信すべきか。第二に、断片化された時間や隙間時間を活用し、地域社会をポジティブにするための具体的にどのような施策があるのか。第三に、ごみステーションの管理、神社の伝統行事や文化財の維持、あるいは山間部の集落による野生動物の防波堤としての役割など、これまで地域社会や神社、山間部の集落が暗黙のうちに担ってきた公共的な機能－それが失われた時、地域社会や行政がそれにどう向き合うのかという深刻な問題意識を持っている。

〇品田座長：

市長からの提起を受け、次回以降の大きなテーマとして、マクロなメッセージ発信のあり方、隙間時間を埋める具体的な実践方策の創出、担い手不足により回らなくなった地域社会の諸課題への向き合い方の 3 点を確認する。これらを念頭に置き、次回以降の議論を進めていきたい。